

日本語ボランティア活動がグローバル人材育成につながる可能性 — 留学生対象日本語授業に参加した日本人大学生 A さんの事例から —

久保田 美映・鈴木 理子

キーワード：グローバル人材、日本語授業、日本語ボランティア、日本人大学生、留学生

概要

グローバル化が進む今日、日本国内の大学においてもグローバルな人材を育成しようと様々な取り組みが行われている。そうした中、多様な人々とコミュニケーションを持ち、視野を広げ、異文化を体験する一つの例として、日本人大学生が日本語授業に参加する日本語ボランティアも挙げられよう。ここでいう日本語ボランティアとは、留学生が日本語を学ぶ日本語授業に、大学生が参加し、日本語で留学生の会話練習相手や意見交換などを行うボランティアのことである。

本研究は、日本人大学生が留学生対象日本語授業で日本語ボランティアをする体験は、グローバル人材に求められる能力を育成できる可能性があるかを検証することを目的とする。その方法として、初級日本語授業に日本語ボランティアとして継続的に参加した日本人大学生らにインタビューを行った。本稿ではその中から A さんの事例を取り上げる。分析 1 により、「外国人に対するステレオタイプの変化」「履修者の留学生との接触による異文化知識の増加」「支援の在り方を自分で発見し、実践」「意思疎通の失敗から原因を特定し、方法を調整」などがあったことがわかった。さらに、分析 2 により、グローバル人材に共通して求められる能力として産学人材育成パートナーシップグローバル人材育成委員会の報告書に挙げられている、外国語（特に、世界で幅広く通用する英語）でのコミュニケーション能力、異文化理解・活用力、社会人基礎力（主体性・実行力・働きかけ力・課題発見力・計画力・創造力・発信力・柔軟性・規律性・傾聴力・情況把握力・ストレスコントロール力の 12 の能力要素）を発揮したことがわかった。このことから、留学生対象の日本語授業にボランティアとして参加する機会は、日本人大学生のグローバル人材育成に寄与しうることが明らかとなった。

1. はじめに

グローバル化が進む今日、企業においてもグローバルに活躍できる人材が求められている。平成 23 年度国立教育政策研究所プロジェクト研究(2011)では、グローバルに活躍できる人材の資質・能力・スキルは、国内外問わず共通するものであり、大学教育の国際活動は、そうした資質・能力・スキルの育成を図る取り組みの一部として位置付けられるべきであることが明確になってきたとしている。その上で、今後の大学教育には、グローバル人材の育成という観点から、異なる育成環境や文化的背景を持つ集団の中で論理的に意思疎通する能力の形成が強く求められており、異文化を体験する多様な機会を提供し、専門教育の授業方法・形態を改善することが急務であるという(P.4)。すでに日本国内の大学では、大学生の留学促進や国内における国際環境整備など、様々な取り組みが行われてきている。そうした中、大学生が留学生対象の日本語授業に日本語ボランティアとして参加する活動も、異文化を体験する多様な機会の一つの例として考えられる。ここでいう日本語ボランティアとは、留学生が学んでいる日本語授業に大学生が参加し、日本語で留学生の会話練習相手や意見交換、留学生のスピーチへのコメントなどを行うボランティアのことである。本研究の目的は、日本人大学生が日本語授業で日本語ボランティアを経験することによって、グローバル人材に求められる能力を育成できる可能性があるかを検証することである。

日本語を母語とする大学生が、日本語授業にボランティアで入った先行研究のうち、日本人大学生の学びについて述べているものとして、以下の論文がある。横須賀(2003)は、日本人大学生においても「インターアクション能力、特に社会文化能力を向上させるために有効な活動となった」、赤木(2012)は、「異文化体験の可能性を提供していると言えるだろう」と、日本人大学生が留学生対象の日本語授業に参加した利点を述べているが、日本人大学生らの生の声は十分に聞こえてこない。永井(2012)は、アンケート調査から、日本大学生が国際交流や留学生に対するイメージの変化や日本についての再認識があったことを報告している。しかし、国際理解教育の視点での考察であり、本研究のグローバル人材育成との関連と比べると、狭い範囲にとどまっている。

大学におけるグローバル人材育成の視点から述べているものとしては、小島ら(2015)、大石(2014)、ファン(2005)などが挙げられる。小島ら(2015)は、アンケート調査から、国内での国際交流もグローバル人材に重要な役割を担っているとし、大学における国際交流における利点や問題点を検討している。大石(2014)は、「日本語教育がグローバル人材育成にどのような係わり方ができるか」を授業実践とそのアンケートから考察し、日本語ボランティアは日本人大学生にとって外に目を向ける気づきが期待されるとしている。し

かし、いずれもグローバル人材育成の対象である大学生を中心に論じたものではないため、日本人大学生個々人に関して、それぞれの経験がグローバル人材育成につながるかどうかは見えてこない。ファン(2005)は、大学のグローバル化の視点から考察した上で、日本語ボランティア経験は、「一人ひとりの学生が自分なりにグローバリゼーションの意義を見出すことができる」ものであるとし、「ボトムアップ的なアプローチも必要ではないか」と述べている。大学におけるグローバル人材の育成は、大学組織としてのグローバル化の視点と、人材である大学生への視点の双方から考えていく必要があるのではないだろうか。そこで、本稿では、ある一人の日本人大学生に焦点を当て、その意識や行動を詳細に見ることとした。

2. 調査協力者および調査方法

筆者らの所属する基盤教育院日本語プログラムでは、本学の大学生に留学生向けの日本語授業に参加してもらえるよう、毎学期日本語ボランティアを募集している。このボランティアは「クラスゲスト」⁽¹⁾と呼ばれており、無償で、単位の認定も行われない。クラスゲスト(以下、「ゲスト」)募集は、スクールバス、web上の掲示などにより告知される。ゲストに関心を持った学生は、学生用のwebページを通じて、登録を行う。その際、ゲストとしての参加な曜日・時限、自己PR(応募動機・特技など)、連絡方法、過去のゲスト参加の有無などを記入し、その情報がリスト化される。日本語授業担当教師のうち、自身の授業にゲストを呼びたいと思った者は、各自そのリストを参照し、その授業に参加可能な応募者に個々に連絡を取り、授業への参加を依頼する。ゲストの主な応募動機は、留学生との交流、留学生のサポート、日本語教育への関心、自身の留学経験から役立ちたいなどである。

筆者らが担当(グループティーチング)している初級日本語授業は、1学期15週、週6コマ1コマ90分で、教科書中心の4コマと週1回の2コマ続きの授業で構成されている。履修者の留学生は、半年または1年間、本学に在学する交換留学生である。出身はアメリカやイギリスなど、欧米系が中心であり、2013年度春学期・秋学期の日本語授業の履修者はそれぞれ19名と8名であった。ゲストには、週1回の2コマ続きの授業において、ほぼ毎週参加を依頼した。依頼内容は、教室内外活動時のグループワークへの参加の他、留学生との日本語会話練習の相手、留学生の日本語スピーチへのコメントなどである。本研究では、2013年度春学期・秋学期に筆者らの日本語授業に参加したゲスト計16名のうち、継続的に参加したゲストへ研究協力依頼をし、承諾を得た6名に半構造化インタ

ビューを行った。インタビューは、2014 年 1 月に、筆者ら 2 名が分担し、学内のプライバシーが保たれる教室において 1 対 1 で行った。質問項目は、応募動機、参加前後の意識、印象に残ったこと、ゲストをどう捉えているかであった。インタビューの内容は録音し、文字化した。

インタビュー時における調査協力者の学年、留学やクラスゲスト経験の有無、その他の学内の国際交流活動への参加状況は、それぞれ異なっていた。本稿では、ゲスト経験がグローバル人材育成に寄与する可能性を見るため、大学初年次の最初の学期に、初めてゲストとして筆者らのクラスに参加し、その段階で留学経験がなく、留学生との接点も限られていた A さんの事例を取り上げることとした。A さんのインタビュー時間は 45 分程度であった。

3. 分析 1

3-1. 分析 1 の方法

ゲスト経験はグローバル人材に求められる能力を育成できる可能性があるかという視点に立ち、SCAT (Steps for Coding and Theorization) を援用し、筆者ら 2 名で協議の上、分析を行った。SCAT は比較的小規模の質的データの分析に有効で、〈1〉データの中の着目すべき語句、〈2〉それを言いかえるためのデータ外の語句、〈3〉それを説明するための語句、〈4〉そこから浮き上がるテーマ・構成概念の順にコードを考えて付していく 4 ステップのコーディングと、〈4〉のテーマ・構成概念を紡いでストーリーラインを記述し、そこから理論を記述する手続きとからなる (大谷 2011)。表 1 は A さんのインタビューの分析例である。

表 1 A さんインタビューデータの分析例

	インタビューデータ	〈1〉	〈2〉	〈3〉	〈4〉
A37	そういうのも。日本人だけじゃなくてやっぱ将来のものかししたら言語ができる人なんか外国の人と話すこともあるだろうし。そっちの方がやっぱ夢も膨らむと思うので、どんどん興味のある人はやってみたらいいかなって思いますね。私は。	日本人だけでなく将来外国の人夢も膨らむやってみたらいい	外国人との会話増加の予測新しい世界への期待他の大学生への勧め	コミュニケーション専攻志望 (背景)	ゲスト参加への勧め

本稿では、まず、A さんのインタビューから得られた「テーマ・構成概念」のうち、意味内容が同じ、もしくは親近性が高いものでグループを作成する作業を重ねて行き、その内容ごとにラベルをつけた。

3-2. 分析 1 の結果

SCAT の〈4〉に当たるもののコードから表 2 の小カテゴリー、中カテゴリー、大カテゴリーが抽出された。一つのコードが複数のカテゴリーと関連するものがある場合は、SCAT のコード化の過程、インタビューデータとその前後の文脈を考慮し、最も関連性の強いカテゴリーに分類した。

以下、本文中では、55 のコードを〈 〉、小カテゴリーを〔 〕、中カテゴリーを[]、大カテゴリーを【 】で、またインタビューデータを斜字で表すこととする。コードには、分析 2 のため、ゴシック体で番号をふった。

表 2 からは、ゲストとしての A さんの全体像が読み取れる。A さんは、国籍・出身地・母語・学年・世代・社会人経験の有無などが多様な留学生が履修する初級日本語授業という【非同質性】の高い環境に、支援者としての【参加意識】をもって主体的に真摯な姿勢で参加、【コミュニケーション力】を駆使した結果、【満足感】を得たことがわかった。特にコミュニケーションに関連するコードが多いのは、ゲストとして留学生とコミュニケーションをとる機会が多かったことに加え、A さんがコミュニケーション専攻志望であることも影響していると考えられる。

表 2 A さんのインタビュー結果のカテゴリー化

大	中	小	コード
非同質性	国際志向性	異文化への興味	1 異文化コミュニケーションへの関心
			2 世界への興味・関心
		将来のイメージ	3 外国へ行く自分をイメージ
			4 国際性への期待による大学選択
	異文化知識		5 履修者の留学生との接触による異文化知識の増加
	既存の概念と変化	日本人 vs 外国人という認識	6 日本人に対するステレオタイプの存在
			7 日本人と外国人を区別して認識
			8 多国籍の履修者を外国人として一括りにした捉え方
		外国人に対する捉え方の変化	9 外国人に対するステレオタイプの変化
		大学生に対するイメージの変化	10 世代の異なる履修者の留学生の存在

			11 社会人経験のある履修者の留学生の存在
	新たな人間関係構築		12 多様な履修者の留学生全員との友好関係の築き
	外国語としての日本語		13 日本語の客観的な捉え直し
			14 相手の日本語力を把握
参加意識	主体的な取り組み		15 支援者としての自覚による熱心で積極的な姿勢
			16 コミュニケーションへの興味からくる主体的参加
			17 自身の将来と関連付けた主体的な参加
			18 心理的ストレスにもかかわらず参加した態度
			19 支援の在り方を自分で発見し、実践
	支援に対する姿勢		20 教室での日本語使用ルールを順守しようとする姿勢
			21 授業的感覚
			22 教師の役割や授業場面での自身の立場を意識
			23 日本語非母語話者の日本への関心を促進する役割意識
			24 教師による学習支援を補うきめ細やかな対応
			25 支援者の立場とコミュニケーション重視をしたい気持ちとの葛藤
コミュニケーション力	他者との関係性を留意	相手への理解	26 日本語使用が履修者の留学生に与える影響への配慮
			27 履修者の留学生の母語使用への理解・共感
			28 日本語非母語話者との1対1のコミュニケーションの緊張への共感
		日本語非母語話者との接触における緊張と不安	29 ラポール形成までの教師の介入の必要性
			30 自身の日本語が履修者の留学生に通じないことにより溶け込めない恐れ
			31 自身の行動が履修者の留学生に与える心理的影響への不安
			32 共通言語力の差からくる心理的負担
			33 初の日本語非母語話者ばかりの環境における人間関係への不安
			34 日本語非母語話者とのコミュニケーション時の双方の緊張感の認識
	コミュニケーション経験知の蓄積	コミュニケーションに対する認識	35 日本語上達意欲・日本語への関心・性格は円滑なコミュニケーションに影響するという認識
			36 性格や発話意欲は円滑なコミュニケーションに影響するという認識
			37 グループコミュニケーションの相乗効果の理解
		コミュニケーションの模索	38 自身の働きかけ方に対する反省

			39 接しにくい人への対応の大変さ
			40 人によって距離感が異なることへの戸惑い
			41 非言語コミュニケーションの使用
		コミュニケーションの失敗	42 初対面の話題選択の失敗
			43 なじみたい感とその場の雰囲気との乖離
		コミュニケーションストラテジーの獲得	44 日本語非母語話者の日本語力に合わせた対応
			45 距離感の居心地悪さ打開のための対応
			46 グループメンバーが自然に日本語を使用するよう意識的にコントロール
			47 失敗から得たコミュニケーション方法の獲得
			48 意思疎通の失敗から原因を特定し、方法を調整
	英語でのコミュニケーション		49 多少の英語でのコミュニケーション力
			50 履修者の留学生の英語使用に対応できない聴解力
満足感	交流・親交の深まりの喜び		51 多様な国籍の履修者の留学生との交流の楽しさ
			52 履修者全員と良好な人間関係が築けた喜び
	ゲスト参加に対する肯定的評価		53 十分支援ができたことによる満足感
			54 今後のゲストとしての参加意欲
			55 ゲスト参加への勧め

4. 分析 2

次に、表 2 をふまえ、グローバル人材の視点から分析する。

4-1. 分析 2 の方法

産学人材育成パートナーシップ グローバル人材育成委員会報告書(2010)では、グローバル人材を「グローバル化が進展している世界の中で、主体的に物事を考え、多様なバックグラウンドをもつ同僚、取引先、顧客等に自分の考えを分かりやすく伝え、文化的・歴史的なバックグラウンドに由来する価値観や特性の差異を乗り越えて、相手の立場に立って互いを理解し、更にはそうした差異からそれぞれの強みを引き出して活用し、相乗効果を生み出して、新しい価値を生み出すことができる人材。」(P.31)とし、「グローバル人材」に共通して求められる能力として、①「社会人基礎力」⁽²⁾、②外国語でのコミュニケーション能力、③「異文化理解・活用力」の3つがあるとしている。これらの3つは、同報告書概要(2010)の以下の図1で示されているように、互いに重複した能力である。

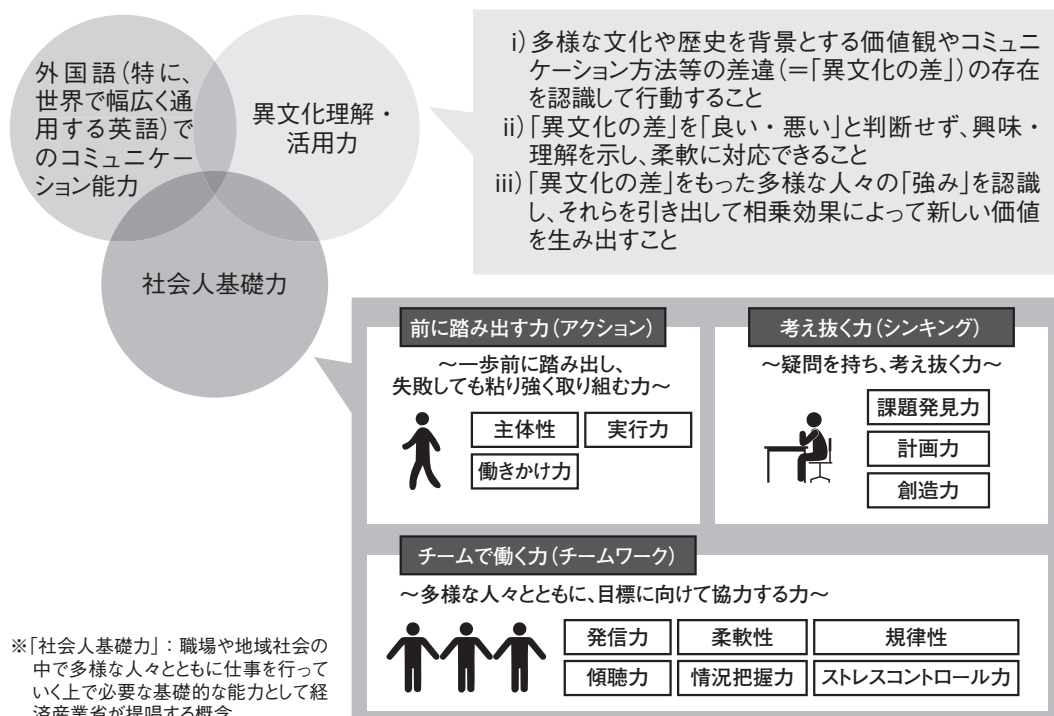


図1 「グローバル人材」に共通して求められる能力

(産学人材育成パートナーシップ グローバル人材育成委員会報告書より)

同報告書(P.35)には、「日本国内の大学においても、外国人留学生や帰国児童生徒、高校での留学経験者などの多様な人々でチームを形成し、協力・協働しながら学ぶスタイルは、「社会人基礎力」や「異文化理解・活用力」を高めるものであり、「グローバル人材」の育成に効果的であると考えられる」と述べられている。そこで筆者らは、日本語ボランティアとして日本語授業に参加した経験と「グローバル人材」に共通して求められる能力との関連性を見るため、表2の55のコードが図1のどの能力に該当するかを対応させ、分析を行った。分析にあたっては、産学人材育成パートナーシップ グローバル人材育成委員会報告書(2010)に加え、社会人基礎力に関しては、さらに経済産業省(2010)を参照した。分析は、文脈を考慮する必要があるため、コード化する前のインタビューデータを確認しつつ行った。また、解釈の偏りを避けるため、筆者ら2名の意見が異なる場合は十分協議を重ねた。

4-2. 分析2の結果

以下は、図1の3つの能力とインタビュー結果との関連について分析したものである。

4-2-1. 外国語 (特に、世界で幅広く通用する英語) でのコミュニケーション能力

A さんが参加した初級日本語授業では、履修者の留学生の日本語運用力の向上を目的としているため、原則的に留学生とゲストは日本語でやりとりをすることになっていた。このため、外国語 (特に、世界で幅広く通用する英語) でのコミュニケーション能力と関連するコードは 49 と 50 のみであった。留学生が授業で英語を使用し始めた場合について「どうしても日本語以外の言語をしゃべっちゃう外国人とか。私にすごい熱く語ってくれてるんですけど、私そんなに英語を流暢に聞き取れるような耳とか持ってなくて」「英語で答えちゃうと英語で返しちゃうと思う」と述べていることから、〈50 履修者の留学生の英語使用に対応できない聴解力〉だが、〈49 多少の英語でのコミュニケーション力〉があることがうかがえる。授業担当教師からは、授業中はできる限り日本語を用いるよう依頼していたが、履修者の留学生が時折英語を使用したことにより、結果的に A さんにとっては、生きた英語の聴解練習の場にもなっていたことがわかった。

4-2-2. 異文化理解・活用力

異文化理解・活用力には、i) 多様な文化や歴史を背景とする価値観やコミュニケーション方法等の差異 (=「異文化の差」) の存在を認識して行動すること、ii) 「異文化の差」を「良い・悪い」と判断せず、興味・理解を示し、柔軟に対応できること、iii) 「異文化の差」をもった多様な人々の「強み」を認識し、それらを引き出して相乗効果によって新しい価値を生み出すこと、の 3 つがある。この 3 つと関連するコードは、i) 4・16・17・〈2・5・9・10・11〉⁽³⁾、ii) 12・〈1・2・4・9〉で、iii) はインタビューデータからは出てこなかった。

A さんはもともと〈2 世界への興味・関心〉〈1 異文化コミュニケーションへの関心〉があり、「留学ができたとか、その、外国語が豊富だったり」という理由から、〈4 国際性への期待による大学選択〉を行った。ゲストに応募したのも「留学生と交流できる機会」「自分の将来につながる」と考えたからで、〈16 コミュニケーションへの興味からくる主体的参加〉〈17 自身の将来と関連付けた主体的な参加〉であり、「異文化の差」の存在を認識、それに興味・理解を示し、自ら行動を起こしている。

さらに「外国人って結構みんな明るいつつというか、結構日本人は結構控えめな感じがして、外国人は、結構なんか、すごい『分かる人』とか言ったら『はいはいはい』とかいう感じの積極性のある人かな、なのかなとか思ったりもしてたんですけど、中にはこう話しかけてもなんか内気だったりして。」と〈9 外国人に対するステレオタイプの変化〉が生じ、異文化理解が深まったことがわかった。「異文化の差」の存在を認識した上で、「異文化の差」を「良い・悪い」と判断せず、興味・理解を示していると言える。この発話では i)・ii) の後半部分である「行動すること」「柔軟に対応できること」については語られていないが、i)・ii) の前半部分に当てはまる。しかしながら、〔日本人 vs 外国人という認識〕

の変化にまでは至らなかった。

また、〈5 履修者の留学生との接触による異文化知識の増加〉はあったものの、「アメリカのどこどこが海がきれいとか、なんかそういうお祭りとか、そういう文化とか食事とかを、なんか、知れてよかった」など、表層的な知識にとどまっている。

表2全体を見てみると、参加当初は、〔日本語非母語話者との接触における緊張と不安〕を持っていたが、〔外国人に対する捉え方の変化〕があり、継続的にゲストとして参加したことで〔コミュニケーションの模索〕〔コミュニケーションの失敗〕を重ね、新たな〔コミュニケーションストラテジーの獲得〕をした結果、学期末には「みんなと仲良くなれた」と述べ、最終的に〈12 多様な履修者の留学生全員との友好関係の築き〉ができた。この変化は、A さんが柔軟に対応できたことを示している。A さんは「交流・親交の深まりの喜び」を感じており、ゲスト経験が i)・ii) の能力を伸ばす機会となったと言えるのではない。

4-2-3. 社会人基礎力

経済産業省(2010)によれば、社会人基礎力は表3のように構成されている。

表3 社会人基礎力はどうか構成されるか― 12 の能力要素と定義―

3つの力	12の要素	定義
前に踏み出す力	主体性	物事に進んで取り組む力
	働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力
	実行力	目的を設定し確実に行動する力
考え抜く力	課題発見力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力
	計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力
	創造力	新しい価値を生み出す力
チームで働く力	発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力
	傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力
	柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力
	状況把握力	自分と周囲の人々との関係性を理解する力
	規律性	社会のルールや人との約束を守る力
	ストレスコントロール力	ストレスの発生源に対応する力

経済産業省(2010) p.39 より作成

A さんの事例では、主体性(4・15・16・17・19・22・24・45・48)・実行力(16・17・18・19・24・44・46・52・53)・働きかけ力(19・45・46)・課題発見力(19・

38・47・48)・計画力(17)・創造力(46)・発信力(24・44・47)・柔軟性(13・24・27・41・44・47・48・52)・規律性(20)・傾聴力(41)・状況把握力(13・14・22・24・25・46・47・53)・ストレスコントロール力(18・45)と、社会人基礎力の12の能力要素すべてに関連するコードがあった。

まず応募動機に関して、「もともと、コミュニケーションに興味があって、特に国際コミュニケーションのほうに興味があって。(中略)たまたま見た時に日本語クラスゲストというのがある、最初は何かなと思って開いたら、留学生と交流できる機会っていうのがある、何か結構アジアの人とかアメリカの人とか多いって結構書いてあって、これは自分の将来につながるのかなと思って応募しました。」と述べており、上述の異文化理解・活用力の他、主体性・実行力・将来のことを考えた計画力が見てとれる。ゲストとして初めて授業に参加した際は、「やっぱり不安というのが一番ありました。自分が日本人で、自分が行くクラスは日本人が全くいないクラス。でなんか、どううまく溶け込めるかな、という感じですかね。」と不安を感じていたにもかかわらず、知り合いのいないクラスに来た。[他者との関係性を留意]する A さんは、ストレスコントロール力と実行力があつたと言える。

週1回授業に継続的に参加していた A さんは、日本語レベルが初級で日本語運用経験の限られている留学生が、日本語でやりとりする場である授業中に英語で話してしまうことに対して[相手への理解]を示しながらも、留学生の支援者としての立場を崩さないよう、様々な[コミュニケーションの模索][コミュニケーションストラテジーの獲得]をしていた。

A12: たまに、だいぶ回数を積み重ねていくうちに、まあいろんな人と話す機会も多くなった時にどうしても日本語以外の言語をしゃべっちゃう外国人とか。(中略)英語をしゃべっちゃダメって感じでしたよね。でもなんか英語とか飛び交っていて、いい過ぎるのも。こうちょっとせつかく自分を表現しているのにその邪魔をするのもあれだし、でも日本語をしゃべんなきゃいけないから日本語を話してって言いたいけど、それを邪魔できなかったり。

T13: なるほど。

A13: 話したくなる気持ちもすごくわかります。私もああいう場にいたら、日本語絶対しゃべっちゃうと思います。何かあったときに。

T14: それで結局英語で言われて、どうしましたか。

A14: 英語で言われて。なんかそれでとりあえず笑顔で。なんとなく単語単語で例えば好きなアニメについて語ってるな、というのはわかって。そのあと、英語で返すんじゃなくて、日本語でこれこれ知ってる?とか、これこれが好きなの?

みたいなことを聞いて。とりあえずそれ日本語で。英語で答えちゃうと英語で返しちゃうと思うんで。日本語で返すと、向こうもそうそうとか、日本語で答えてくれることが多かったんで。いっときは不安でした。

この一連の発話を見ると、A さんの規律性の高さから〈25 支援者の立場とコミュニケーション重視をしたい気持ちとの葛藤〉が生まれ、同時に〈27 履修者の留学生の母語使用への理解・共感〉を見せていることから、柔軟性を持っていることがわかる。経済産業省(2010)では「相槌や共感等により、相手に話しやすい状況を作ることができる」(P.39)ことを傾聴力が発揮できた例としていることを考えると、共感を示し、「とりあえず笑顔で。」と〈41 非言語コミュニケーションの使用〉によって会話を途切れさせないよう工夫したことは、傾聴力を持っていると言ってよいだろう。さらに、ゲストとして留学生と日本語で話す経験を重ねるうちに、自ら〈46 グループメンバーが自然に日本語を使用するよう意識的にコントロール〉する方法を見出し、留学生を良い方向に動かしていったのは、A さんの状況把握力・創造力・働きかけ力・実行力が発揮されたことを表している。

次の発話では、特に_____部に〈47 失敗から得たコミュニケーション方法の獲得〉がなされたことが表れている。相手が自分の発話を理解できなかったことがわかったという状況把握力、話し方を変えてみる柔軟性、どうすれば相手にとってわかりやすくできるのかを自ら見つけた課題発見力が発揮されている。また、_____部に見られる〈13 日本語の客観的な捉え直し〉は状況把握力と柔軟性があるからこそできることである。

A46: 教えるっていうのを今まであまりやったことがなかったんです。誰かに何か教えるとかなくて。すごい今のクラスゲストの活動を通じて、こう自分は普段何気なく話している日本語なんですけど、やっぱり向こうの方にとっては、日本語を勉強しにこっちにきてるわけであって、そんな完璧な日本語を話せない自分がいて、自分が当たり前に思ってることを当たり前に教えるのは相手の理解をあまり強くしないというか、だったんで。日本語についてこう、違う目線というか客観的に見たのかな、という気がしました。外国人ってこういうのが苦手なんだとか。自分は普段何気なく使ってるけど。小さい「つ」とか。

T47: 小さい「つ」とか。

A47: 漢字とかもふりがなとか。なんかそういうの、自分はいつも使っている言語なんで、向こうの人にはわかんないから、こういうのが外国人は苦手としてるんだなっていうのがわかりましたね。

T48: じゃあ、日本語という言葉もちょっと。

A48: そうですね。早く言っちゃうとわかんないからゆっくり言ってあげるというか、気を使うというか、丁寧に教えるというか、こう自分の中で行くたびに身

についてきたかなというか。それはなんか思いましたね。日本語、日本語。その活動を続けてよかったと思います。

さらにこれらの発話全体から「聞き手がどのような情報を求めているかを理解して伝えることができる」(経済産業省 2010, P.39) という発信力を持っていると言えよう。

紙面の都合上、すべてのコードについて詳細な説明はできないが、上述の例だけでも、A さんがゲストとして初級日本語授業に参加した経験を通して、図 1「グローバル人材」に共通して求められる能力のうち、異文化理解・活用力の iii) 以外のすべてが発揮されたことがわかった。

5. 考察

5-1. グローバル人材育成の可能性

筆者らは、日本人大学生が留学生の日本語授業に参加することが、グローバル人材育成の一つの方法になりうるのではないかと考えていた。以下に外国語でのコミュニケーション能力、異文化理解・活用力、社会人基礎力の 3 点に分けて考察する。

5-1-1. 外国語 (特に、世界で幅広く通用する英語) でのコミュニケーション能力

4-2-1 で述べたように、日本語授業に参加するゲストには、その授業の担当教師の考え方や授業内容にもよるが、基本的に授業中は日本語の使用が望まれているものの、結果的に外国語の聴解力の向上が図れることがわかった。授業を通して交流を深めた留学生と授業外で外国語を用いることもでき、ゲスト経験は外国語でのコミュニケーション能力向上のきっかけにもなりうる。

また、ゲストと留学生の日本語でのやりとりを重ねることが、コミュニケーション経験知が蓄積される機会となっていることがわかった。友松 (2012) は「語学力はコミュニケーション力の重要な構成要素であるが、コミュニケーション力に包含される一つ的能力である」と述べ、「日本でコミュニケーションがうまい人は、潜在的能力において、外国でも通用するはずである」(P.6) と主張する。さらに、「グローバル・コミュニケーション」を「ローカル・コミュニケーション」と対照させ、「互いをよく知らない者同士のコミュニケーション」とした上で、「日本の大学はこれから力を入れるべきは、異なった価値観を持つもの同士のコミュニケーションであろう」(P.28) としている。留学生を対象とした日本語授業では、母語、国籍、出身地、世代、社会人経験の有無など、多様な人々と接することができる。日本人大学生が日本語授業にゲストとして参加することは、日本人大学生の外国語でのコミュニケーション能力育成の一助にもなるのではないか。

5-1-2. 異文化理解・活用力

異文化理解・活用力との対応は、当初の筆者らの予想より少なかった。これは、本研究が対象としたゲストが初級日本語授業に参加したことが影響していると考えられる。履修者の留学生の日本語レベルが低いため、異文化に関して日本語で深く考え、話し合うような活動は行われなかった。留学生の日本語レベルや授業内容によっては、iii) も含まれることが予想される。

また、異文化知識の増加が表層的なものにとどまっていたことに関しては、留学生の日本語レベルの他、日本人学生がこれまで異文化について深く考える機会がなかった可能性も考えられる。グローバル人材育成を視野に入れて授業を行う場合は、授業担当教師が意識し、留学生と日本人学生双方が協働的に文化について学ぶ活動を増やす工夫も必要であろう。

5-1-3. 社会人基礎力

ゲストとして日本語授業に参加することにより、社会人基礎力の 12 の能力要素すべてが発揮しうることがわかった。但し、社会人基礎力が発揮できるかは、個人差の他、授業内容などによって異なることが推測される。本稿が対象としたゲストの場合、もともと持っていた能力が発揮されたのか、ゲスト経験によって獲得された能力なのかは判断できなかった。社会人基礎力を計る客観的な尺度がない現状では、今回のケーススタディに限界があることは否めない。しかし、経済産業省(2010)は、社会人基礎力は「課題や場面や状況に関与したことで得られる満足感、自分の経験や知識を活用してそれを成し遂げたときの達成感などを通じて育まれる(P.97)」と考えられ、「繰り返され意識化されることで、より安定したものになっていく」(P.96)としている。このことから、既存の能力であっても、それを活用する機会を多く持ち、[ゲスト参加に対する肯定的な評価]ができた経験は、グローバル人材育成につながると言えるのではないだろうか。

今後、日本語ボランティアを、グローバル人材育成の場の一つと位置づけ、積極的に取り入れていくのであれば、単に能力を発揮する機会を作るだけでは不十分であろう。ゲストが社会人基礎力を意識し、自身を振り返る場を、教師が意図的に設定することが必要である。

5-2. 教師の関与と継続的な参加の意義

ゲストは、自然に学内の留学生と交流するのとは異なり、授業担当教師の依頼により授業に参加する。言い換えれば、個人的に留学生と交流するのが難しい日本人大学生でも、留学生と接触できる機会である。佐藤ら(2011)は、「留学生はしばしば留学生だけにかたまっているのでは、日本人が話しかける機会も少ないし、また緊張したり、恥ずかしかった

りして話しかける勇気がもてなかったりする」(P.149) という日本人大学生のコメントを紹介している。また、横田・小林(2013)は、「留学生や外国人に関わりのない学生に対し、いきなり海外に目を向けなさいといってもなかなか難しい」(P.163) とし、大学内において留学生と交流できる機会や海外を身近に感じられる環境を提案している。

A さんの場合も、〔日本語非母語話者との接触における緊張と不安〕を持っていた。そのため、初回参加時にグループ活動を行う際、どのグループにどのゲストが入るかを授業担当教師がくじで決めるといった〈29 ラポール形成までの教師の介入の必要性〉があった。ゲストとして授業に参加するという環境では、留学生と日本人大学生の間に教師が入ることで、日本人大学生の多様な人々との接触を円滑に進めることができる。

さらに、4-1-3 で取り上げた A12、A14、A48 の発話からは、継続的にゲストとして参加することにより、徐々に変化していった過程が見える。A さんのように「結構最初はすごい不安だったんですけど、結構国境を越えてみんなと仲良くなれたのかなって思って楽しかったですね。」と最終的に〔ゲスト参加に対する肯定的な評価〕ができた場合、今後も、多様な文化的背景を持ち、自分と異質な人々との接触に意欲的になることが期待できる。

6. まとめと今後の課題

本研究において、日本人大学生の留学生対象日本語授業への継続的な参加経験は、外国語(特に、世界で幅広く通用する英語)でのコミュニケーション能力、異文化理解・活用力の一部、社会人基礎力の 12 の能力要素の全てを発揮しうることが明らかになった。日本語ボランティア活動はグローバル人材育成の一つの方法になりうると言えよう。ただ、これはあくまでケーススタディであるため、本稿が対象としたゲストの資質が反映されているとも考えられる。同じような状況下でも、人によって全く異なる分析結果が出てくる可能性がある。また、今回の事例からは、グローバル人材に求められる能力育成過程を示すことはできなかった。そのため、さらに日本人大学生の日本語授業参加経験の事例を集め、分析するとともに、ゲストによる事前・事後の自己評価や相互評価の実施を検討する必要がある。

グローバル人材育成に向けた大学の取り組みや日本人大学生の国際交流というと、まず日本人大学生の海外留学が思い浮かぶだろう。しかしながら、「経済的な理由、語学力不足、就職活動の時期との重複等が留学の阻害要因となっている」(ベネッセ教育研究開発センター 2012, P.58) ため、海外留学はだれにでもできるわけではない。そこで、国内の普通の大学生活でいかにして多様な人々と接触し、様々な経験をする機会を持つかが重

要となってくる。そうした観点から、大学で行われる授業に参加する日本語ボランティアは、海外留学よりもハードルの低い国際交流・異文化体験の一つの機会だと言えるだろう。今回の事例のように留学生と仲良くなれたと実感した体験は、今後の日本語非母語話者外国人との接触場面での自信になる。まずは大学の授業で、教師がいて安心できる環境において、最初のステップを踏み、慣れることで、やがては自身の行動範囲を広げていくようになるのではないかと。今後も、日本語授業でのボランティア経験が日本人大学生の成長やグローバル人材の育成にどう役立つのかを考えていきたい。

【注】

- (1) クラスゲストは日本人である必要はないが、実際に応募する学生は日本語母語話者がほとんどである。
- (2) 社会人基礎力とは、経済産業省が2006年から提唱する概念で「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」である。
- (3) 異文化理解・活用力 i) の一部にのみ該当すると判断されたコードについては、() に入れた。ii) についても同様。

参考文献・参考 URL

- 赤木浩文 (2012)「専修大学ウーロンゴン日本語コースに関する実践報告」『専修大学外国語教育論集』40, pp.123-136
- 大石寧子 (2014)「グローバル人材育成における日本語教育の役割—大学における現状を踏まえた一考察—」『徳島大学国際センター紀要・年報 2014』 pp.19-23
- 大谷尚 (2011)「SCAT: Steps for Coding and Theorization—明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法—」『感性工学』10 No.3, pp. 155-160
- 小島奈々恵・内野悌司・磯部典子・高田純・二本松美里・岡本百合・三宅典恵・神人蘭・矢式寿子・吉原正治 (2015)「日本人大学生の国際交流に関する意識調査—内向き志向と国際交流意思の関係—」『総合保健科学広島大学保健管理センター研究論文集』31, pp. 35-42
- 経済産業省 社会人基礎力 <http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.html> 2015年9月21日閲覧
- 経済産業省 (2010)『社会人基礎力 育成の手引き—日本の将来を託す若者を育てるために 教育の実践現場から』, 朝日新聞出版
- 佐藤勢紀子・末松和子・曾根原理・桐原健真・上原聡・福島悦子・虫明美喜・押谷祐子 (2011)「共通教育課程における「国際共修ゼミ」の開設—留学生クラスとの合同による多文化理解教育の試み—」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』6, pp.143-156
- 産学人材育成パートナーシップグローバル人材育成委員会 (2010)『報告書～産学官でグローバル人材の育成を～』

本文

http://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/san_gaku_ps/2010globalhoukokusho.pdf

概要

http://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/san_gaku_ps/2010globalhoukokusho_summary.pdf 2015 年 9 月 21 日閲覧

友松篤信 (2012)『グローバルキャリア教育』ナカニシヤ出版

永井涼子 (2012)「日本語授業におけるビジターセッションの取組と意義 —日本人学生・留学生双方の視点から—」『大学教育』9, pp.53-64

ファン、サウクエン (2005)「開かれた日本語教室—ビジターセッションと外語大のグローバリゼーション—」『外語大における多文化共生：留学生支援の実践研究』神田外国語大学 http://www.kuis.ac.jp/icci/publications/pj_results/ssp/03-5_fan.pdf 2015 年 9 月 21 日閲覧

平成 23 年度国立教育政策研究所プロジェクト研究 (2011)『大学におけるグローバル人材育成に関する調査研究報告書』http://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pdf-report/h23/23-5-01-report.pdf 2015 年 9 月 21 日閲覧

ベネッセ教育研究センター(2012)「大学データブック 2012 第 3 章」http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/dai_databook/2012/pdf/data_06.pdf 2015 年 9 月 21 日閲覧

横須賀柳子 (2003)「ビジターセッション活動の意義とデザイン」宮崎里司・ヘレン・マリOTT 編『接触場面と日本語教育』明治書院, pp. 335-352

横田雅弘・小林明編 (2013)『大学の国際化と日本人学生の国際志向性』学文社